



目指すは「〇〇の加藤」

2005年度 博士前期課程修了
2011年度 論文博士号取得 加藤 創さん

ー総術に入学したきっかけは？

「薬」が嫌いだったんです。薬学部だったのに、薬剤師にはなりたくなかった。でも、研究は続けたい。それで、大学院進学を相談したところ、原田先生がいらっしゃる総合学術研究科に進むことになったんです。

ー指導教員の先生は強烈な指導教員だった？

はい！あ・・・はい(笑) 怖かったですね。
でも、ただ怖いだけじゃない。いつも、そこには必ず理由がある。なんというか、うん、親身になってくれる。だからついて行けた。怖いけど、すごい先生なんです！



ーすごい先生？

原田先生は、異分野の研究発表でも、必ずと言っていいほど質問をされる。私たちにも、ただ聞くのではなく、必ず1つは質問するように指導されていたので、毎回必死でした。異分野とはいえ、聞いてみればイントロくらいならわかるんです。だから、まずはわかるところをしっかりと聞く。後はとにかく、はじめから「わからない」ではなく「自分の領域なら・・・」と置き換えて聞く。そういう習慣が身に付きました。

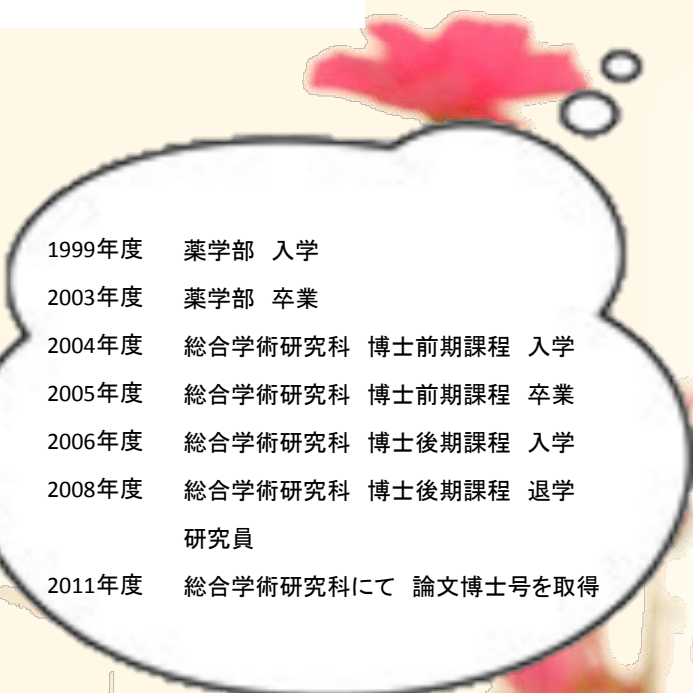


指導教員の原田先生

ー博士後期課程を2年で中退されていますね。

研究が思うように進まなかったり、事務作業に追われたり、後輩の世話があたり・・・自分の時間がないような気がして、なんだか疲れていましたね。それで、辞めちゃったんです。今思えば、時間も、全然無かったわけじゃないんですけど。

でも、辞めてすぐ研究員として戻ってきました(笑) とにかく研究がしたかったんです。辞めるくせに、研究は続けさせてくれて、かなりワガママなことをしていたんですが、原田先生はしっかり受け入れてくださいました。



1999年度	薬学部 入学
2003年度	薬学部 卒業
2004年度	総合学術研究科 博士前期課程 入学
2005年度	総合学術研究科 博士前期課程 卒業
2006年度	総合学術研究科 博士後期課程 入学
2008年度	総合学術研究科 博士後期課程 退学 研究員
2011年度	総合学術研究科にて 論文博士号を取得

—「博士(学術)」への思いは？

取得できてよかったです。今、学会に行っても、狭い分野の人しかおらず、幅広い分野を知るとい環境は、よっぽど自分で意識しないと得られません。専門外の話をおんなに聞けるなんて経験は「薬学」じゃ得られなかった。自分のやりたいことが、他の立場から見るとどのように見えているのか意識するようになり、研究にも良い影響がありました。

あと、この学位、話のネタになるんです。周りは、みんな医学や薬学。名刺を出すと必ず「ん？」って顔をされるんですよ。そこで、「これは、文理融合の学びができる大学院で取得したもので・・・」と説明するんです。



—「文理融合」を高く評価されていますね。

大切な考え方です。自分たちがいくらすごい技術を開発しても、それを使う人の理解を得られなければダメですからね。環境問題でも、医療・研究分野でも、なんでも。技術があるだけじゃ何にもならない。人に、自分のやっていることをうまく説明したり、どういう風に使えるのかをわかりやすく伝えたりすることができなければ、やっている意味がないんです。これは、研究者として生きていけば、どこかでぶつかる問題ですが、院生という早い段階で気づけたのは本当に良かったと思います。

—では、理系の加藤さん。どんな研究をされたのか、文系のインタビュアーに教えてください！

いいですよ(笑) まず、Microcystin(マイクロシスチン)について。

これは、湖とかに発生するアオコがつくる毒です。

この毒が、そのまま水道水に入っちゃったら大変ですよ。それで、何とかして取り除く方法が必要になります。滅茶苦茶な方法、たとえば湖に思いっきりガーッと塩酸を垂れ流すとかすれば何とでもなるんですが、それじゃあ別の問題が起きますよね(笑)だからできるだけ、元々自然に存在するものを活用して、毒の除去を行おうと考えたんです。

考えることは大きく2つ。分解すると別の強い毒が生まれる可能性もあるので「どう分解するか」、あとは、ただ毒を分解できるだけじゃ面白くないので「別の分野にも使えないか」。ここまで、わかりますか？

Microcystin分解性細菌B-9株の機能解明に関する研究

—はい。別の分野って具体的にどんなものがあるんですか？

人のタンパク質とMicrocystinは、どちらも成分がアミノ酸なんですね。

だから、そのタンパク質を分解させて、成分を分析することができます。

他には、薬。これも成分がタンパク質やペプチドなんですが、どういうものがどれだけ入っているか分析することができます。

—環境改善だけじゃないんですね。

もちろん、環境改善がスタートであり、一つのゴール。さっきあげた具体例もね。ただ、衛生研究所や薬の研究をしている所ならそこで終わりでも良いけど、我々はそうじゃない。ゴールにたどり着いたからと言って終えてしまうと、仕事なくなっちゃいます(笑) だから、それをどんどん別の方向に活用しようって広げていくのが、大学の研究なのかなって気がしています。



一わかりやすかったです。さすが先生。

いえいえ。具体的な実験データを出して説明したらわからないかもしれないけど、異分野でも大丈夫。こんな風に、人の話ってイントロはわかるものなんです。専門部分は、眠くなっちゃうかもしれないけど。

一今後の目標は？

「〇〇の加藤」って言われるような人になりたいですね。研究者の道を選んできましたからには、これが目標です。まだ駆け出しで、壮大すぎますが(笑)「おお、あの加藤か！」って言われたい。

そのためにはまず、人が気付いていないところを攻めないといけないと思います。人がやっていることをやっても意味がないので。もちろん、ある日突然ひらめくわけないので、勉強や研究をしっかりとからの話。なんかひらめきたいっていうのは、まずそこからですね。

一後輩へのメッセージをお願いします。

メッセージ……うーん、何を言えばよいでしょう(笑)
インタビュアーからリクエストのあった次の質問にお答えして、これに代えますね。

一文理融合をうまく取り入れるコツは？

僕の場合はプレッシャーのおかげでしたね(笑)

「質問しろ」って言われてたんで。いつも、「質問するためにしっかり聞かなきゃ」という意識で聞いていました。

先ほどもお話ししましたが、まずはイントロを理解すること、そして、自分の領域に置き換えて聞くことを意識している内に、なんとなく見えてくるようになっていました。あとは、何度も聞くことで、少しずつつかんでいく感じ。

もちろん、その道の専門家の方に追い付くとか、同じレベルで話をするのは無理ですけど。でも、だから無理だって言っているんじゃないくて、自分に近いところ・わかるところから攻めていくんです。

学部から来ると、異分野の人は多い。難しいって思いこまず、まずわかるところから理解していけばいい。優しい先生ばかりだから、質問したって怒られたりしません。

そういう意識を持つことが大事だと思います。